

## 20世紀初頭ハワイにおける日系移民の就学前教育に関する一考察

塩路晶子

(キーワード：就学前教育，ハワイ，日系移民)

### 1. はじめに

1868年に、元年者といわれる日本人がハワイに来島して以降、多くの日本人がハワイに渡り、サトウキビなどのプランテーションを中心として労働するようになった。しだいに家庭生活を営み、定住の道を歩む日系移民は、自らの子どもたちの教育に大きな関心を抱くようになる。日系の子どものために、最初に日本人学校が開設されたのは、1893年のハワイ島コハラだと言われている。その後、1898年のハワイ併合に伴い、ハワイ生まれのすべての子どもは6歳の学齢期になるとアメリカ合衆国の公立学校で学ぶことが義務づけられた。そこで日系移民の子どもたちは、公立学校の始業前の早朝や放課後に、日本人学校で日本語を学んでいた。初期の頃には、日系移民一世である日本人の保護者の子どもの教育を担うということで、日本語学校は日本国内と同じ教科書を用い、天長節を始め日本国の祭日を祝い、教育勅語を教えていた。しかししだいに、外国語学校への取り締まりが強まると、1915年頃には各地の「日本人学校」は「日本語学校」へと改称し、1927年頃から布哇教育会を中心に、日本語学校で使用するためにハワイ独自の教科書を編集することになったのである。そこで以下、本稿では特に必要な場合を除いて日本語学校と表記することとする。

ハワイ日系移民の教育に関する先行研究においては、沖田行司が日本におけるハワイ日系移民の教育論と現地ハワイへ及ぼした影響を明らかにしている<sup>1)</sup>。また、足立隼宏が、ハワイの公立高校において日系二世がどのようにアメリカ化されたかを明らかにしている<sup>2)</sup>。さらに吉田亮はハワイにおけるキリスト教団体の日系二世に対する伝導と教育を分析している<sup>3)</sup>。ハワイ日本語学校における教科書や学校行事の内容を分析したものとしては、金子邦秀の研究<sup>4)</sup>が挙げられる。ハワイ日系二世の言語習得に関しては例えば、井上智義の研究<sup>5)</sup>がある。これらの研究は主に、就学以後の教育を対象としている。

幼児期に日系移民の子どもたちはどのような教育を受けていたのだろうか。現代の日本においても、幼児期の教育の重要性が指摘されている。子どもたちは「白紙」の状態ですぐに公立小学校や日本語学校に入学してきたわけではなく、入学以前に様々な体験をし、多くのことを身につけてきていたはずである。

当時のプランテーションのキャンプにおいては、母親の就労を援助するために、キャンプ内に幼稚園・託児所などが設けられていたようである。幼稚園・託児所はプランテーションの所有者や、キャンプ内のお寺・教会等が設置することが多かった<sup>6)</sup>。また、日系移民はプランテーション以外の都市部にもしだいに仕事と生活の場を広げていき、そこにも就学前の子どもを預かる幼稚園などが設置されていた。

そこで本稿は、20世紀初頭のハワイにおいて、日系移民の子どもたちが就学前に通っていた日本語学校幼稚科及びハワイ無償幼稚園の保育について考察することを目的とする。日本語学校幼稚科は、日系移民の子どもたちのための、日本語学校の幼稚園課程である。また、ハワイ無償幼稚園は、ハワイ無償幼稚園協会(Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands)が開設していた幼稚園で、日系の子どもをはじめ、さまざまな人種の子どもたちが通っていた英語の幼稚園である。

### 2. 日本語学校幼稚科の保育

#### (1) 概要

日本語学校は、1890年代から日系移民の子どもたちの増加に伴い、ハワイの島々の各地に多数開設され、公立学校に匹敵するほどの数にのぼった<sup>7)</sup>。日本語学校の種類は、独立系(無宗教)、本願寺や浄土宗などの仏教のお寺が開設した学校などがあつた。

日本語学校の記念誌に掲載されている当時の子どもたちの集合写真には、幼児と見られる幼い子どもが最前列に並んで座って写っている<sup>8)</sup>。日本語学校では、幼稚科、小学部、補習科、中女学部、高等科などの課程があった。1932年の布哇教育会所属の日本語学校生徒数は、次の〈表1〉ように示されている<sup>9)</sup>。

〈表1〉

	男	女	計
幼稚科	763	720	1,456
小学部	14,986	13,988	28,974
補習科	351	358	709
中女学部	2,627	2,348	4,975
合計			36,096

小学部にはほぼ全員の日系人児童が通っていたとみられるため、幼稚科に通っていたのは、日系人就学前幼児のうち約5%であるとする<sup>10)</sup>。日本国内で昭和初期に幼稚園に通学していた幼児が5.4%<sup>10)</sup>であることと比較すると、ほぼ同程度であるといえよう。

## (2) 保育内容

1930年のパラマ日本語学校の記念誌によると、幼稚科の授業時間は、月曜日から金曜日まで午後1時半から2時15分までとなっている。一日、わずか45分の保育時間である。土曜日は休業である<sup>11)</sup>。幼稚科の授業料は90セントと記されている。日本語学校の教員は日本人・日系人であり、このパラマ日本語学校の1930年度の受け持ち教員は、神代（主任）、大村（助手）となっており、二人の教員が60人程度（男子37人、女子22人）の幼児を保育していた<sup>12)</sup>。

保育内容は、1週間の「教授時間割」によると、遊戯・唱歌が2.5時間、手工が1時間、話方が0.5時間、数方が0.5時間となっており、時間の多くが遊戯と唱歌、手工に費やされていたようである。

また、1936年に発行された『家庭中心子供の教育』は、ハワイ島オノメアにあった日本語学校の校長・古生美男氏の教育実践や教育論を記述した著書であり、これには幼稚科を含め学校全体で学校園での栽培に取り組んでいたことが記されている。小さい子どもたちも、自分に割り当てられた場所を耕して植物の世話をしていたようである。学校園は、「農業に関する智識を廣め土に親しむ良習慣を養ふのみならず、自然理法に対する探求心を起こさしめ児童将来の研究心を養成する上に多大の効果のある事を認むるものであります。』<sup>13)</sup>と述べられている。パラマ日本語学校幼稚科のような保育内容に加えて、栽培活動を通じて自然に親しんだり、知識を得たり考えたりする保育を行うこともあったようである。

それでは1930年頃、日本国内の幼稚園ではどのような保育が行われていたのであろうか。1925年に幼稚園令が制定されて以降、幼稚園の保育はさらに発展していた。保育項目としては、遊戯、唱歌、談話、手技などが多く行われていた。またしだいに観察、運動などがさかんにもなっていたようである。

ハワイの日本語学校幼稚科と、日本国内の幼稚園の保育項目のタイトルからすると、幼稚科の保育は、遊戯や唱歌、そして自然の観察など同じようなものが行われていたと見られる<sup>14)</sup>。

## (3) インタビューより

筆者は、2011年7月6日に、ハワイ島ヒロ在住の日系二世の女性であるニシ・トモエさんにインタビューを行うことができた。ニシさんのお話から当時の日本語学校幼稚科の様子をうかがい知ることができる。インタビュー場所は、ハワイ島ヒロの布哇日系人会館である。インタビューは半構造化面接法により行った。ニシさんは英語と日本語を話すバイリンガルであり、インタビューは日本語で行われた。

ニシさんのご両親は山口県出身の日系一世で、ご自身は7人きょうだい、1923年ハワイ島椰子島の生まれである。3人の男の子を育てたお母さんでもある。当時、ヒロにあった椰子島日本語学校へは5歳の幼稚科から入園しているため、1928年頃通園していたことになる。次頁の〈表2〉は、インタビューの一部である。

インタビュー時、ニシさんは87歳である。日本語学校幼稚科のこと、英語と日本語の両方を身につけたときのご苦労などを話していただいた。インタビューによると、幼稚科の保育時間は1時間から30分程度と短く、公立

## &lt;表2&gt;

S (筆者)：それでえーと、幼稚園は何歳で行ったんですか？  
 N (ニシさん)：幼稚園はね5つくらいでしょ。  
 S：それが、日本人小学校の幼稚園？  
 N：はい。  
 S：日本人の子どもばかり？  
 N：だいたい、日本人。他の人種は一人か二人くらい。ほとんど日本人。日本学校へ行かないといけない、くらい、そう思ってたんですよ。行かない子は少ない。行く子ばかりで。  
 S：椰子島日本語学校・・・先生は女の先生でした？  
 N：はい、女の先生。  
 S：その先生も日本人？  
 N：はい、日本人。  
 S：日本語でしゃべる？  
 N：はい、日本語。英語でしゃべらない。  
 S：で、幼稚園ではやっぱり遊ぶ？  
 N：それがね、全部、何したか・・・月日がたってるから・・・  
 S：そうですね・・・歌をうたったり？  
 N：そうね、ほとんど歌でしょうね。歌をしたり遊技をしたり、なんかしたんでしょう。  
 S：先生はピアノを弾いてました？  
 N：Yes, ピアノを弾いていた。ピアノを弾かないとわからんから。ピアノはありました。悪い子どもがピアノの上に座られた子どももありました。小さいでしょ、みんな小さいから。  
 S：先生が座らせるんですね、座るときなさい、みたいな。何人くらいクラスに友達はいましたか？  
 N：うーん、それがいろいろですよ。多いクラスもあるし、小さいクラスもあるし。だから、何人居たか・・・わかりません。数えてみませんでした。  
 S：女の子も男の子も両方いて？  
 N：はい。  
 S：外で遊んだりとか？  
 N：そうね。  
 S：おにごっことか？  
 N：No, そんなのしない。それを覚えてないんです。大きなホールを作ってね。古い建物を一緒にくっつけたような校舎だった。そこにホールを作ってね。幼稚園用の。だから、そこで何でもしたんだと思いますね。後に剣道なんかするときには、そこを使って。  
 S：じゃあ、新しかったんですね、そのホールは。  
 N：そう、ホールだけが新しかった。後はみんな古い。  
 S：他の校舎はみんな古いんですね。幼稚園も2時とかから始まりました？何時からだったんですか？  
 N：そうですね、幼稚園ははやいですよ。  
 ・・・・中略(一引用者)・・・  
 N：だから、ピアノ弾いて歌ったり、それも1時間ですから、1時間のうちに。  
 S：1時間のうちに歌ったり、ホールでも遊んだり・・・  
 N：そうかもしれません。30分かもしれません。  
 S：黒板に先生が何か書いて、教えたという記憶はありますか？「あ」をこう書くよ、とか。  
 N：No, 幼稚園はないでしょ。1年生からあいうえおを習うから、あの頃はひらがなでなくて、カタカナから始めたの。私たちは。カタカナから習って、それからひらがなに移って。  
 S：教科書があつて？  
 N：はい、教科書があつて。ハワイ教育会というのがあって、そこで創った教科書。ほうぼの学校に配ってた。それがないからね、お見せすることはできない。

学校の放課後の午後から行われていたとのことであった。ニシは、椰子島日本語学校幼稚科で日本人の先生がピアノを弾いて、日系人の幼児が男女一緒に歌ったりしたと述懐している。ニシさんによると教科書や黒板を用いてカタカナ等を習うのは、幼稚園では行われず、小学校以降だったようである<sup>15)</sup>。パラマ日本語学校の保育内容と同様に、幼稚科においては、遊戯や唱歌が中心ということであろう。

#### (4) 反試訴派の英語保護園

ところで、1915年頃、日本人学校は日本語学校へと名称変更し、アメリカ合衆国の準州としてのハワイの実情にあった形態と内容に変化していったことには先にも触れたが、1921年7月1日には外国語学校取締法が施行された。そしてこの取締法に反対する日本語学校が1922年12月28日に試訴の裁判を起こす一方で、非試訴派の日本語学校との対立を生むことになった。そのような中で、1923年1月1日には、日本語学校の学年を短縮する規則が実施され、幼稚科と小学校1年生・2年生は保育・教育を行うことができなくなった。そこで、ホノルル市内では13の日本語学校のうち、パラマ日本語学校、中央学院、東洋学園、カリヒ日本語学校の4校を除く他の

日本語学校（フォート学園，カカアコ日語校，布哇女学校，パラマ学園，マキキ日本語学校，モイリリ日本語学校，ワイキキ日本語学校，マノア日本語学校，カイク日本語学校）は、幼稚科・小学校1年生・2年生のために、英語で保育・教育を行う児童保護園（英語保護園）を開設することにしたのである。

『日布時事』<sup>16)</sup>によると、パラマ学園の児童保護園の幼稚科は午後1時に、1・2年生は2時に開始されている。保育内容は月曜日：手工，お話／火曜日：復習／水曜日：唱歌，遊戯／木曜日：復習／金曜日：唱歌，お話／土曜日：手工，図画／となっており，これらの指導を英語によって行うというものである。つまり，従来幼稚科で行われていた遊戯や唱歌などの保育項目を，日本語ではなく英語で行うのである。さらに保育にあたって英語教師を雇用する旨も，会議によって決めている<sup>17)</sup>。

また，ハワイ島ヒロの本願寺附属キラウエア児童監督娯楽園は，午後2時半から4時半まで開園し，下の<表3>のような時間割で保育を行うことになった<sup>18)</sup>。

<表3>

	月・水・金	火・木・土
2時半から3時	お話と朗読	米国の歴史
3時から3時半	遊戯と運動	世界地理のお話
3時半から4時	編物及び切細工	ホーム，レッスン
4時から4時半	ホーム，レッスン	

パラマ学園の児童保護園の保育内容は，従来の日本語学校幼稚科の保育内容と同じような名称である。日本語学校幼稚科が，日本国内の幼稚園と同じように，日本の歌を歌い日本の遊びをしていたとするなら，それらを英語で行うことが本当に可能だったのであろうか。英語教師を雇用しようとしていたことから，用いる言語が英語になるだけでなく，幼児の遊びもアメリカ的なものに変化しようとしていたのかもしれない。またキラウエア児童監督娯楽園では，米国の歴史や世界地理のお話なども保育内容に盛り込まれている。日系の幼児にアメリカの歴史や地理を教授しようとするのは，大きな変化であるといえよう。

この児童保護園については，「児童を愉快地に遊ばす裡に英語力の増進と不良化より防ぎ止めよと云ふ仕組みで児童が喜ぶは勿論父兄側でもこんな結構な事になるんであつたら最初から騒がずともよかつたと云ひ出す始末があちらこちらで演ぜられた。」と書かれている。パラマ学園の高村校長は，「本日から新設さるべき保護幼稚園の目的は児童の英語力を増進するのと周囲の不良化より保護するにありて公立学校との関係はどうなるかと言へば即ち公立学校一年を修業して最早英語習得の苦しみより除外され児童の頭に相当の余裕が出来て後日本語を教へるといふ順序になるから児童能力の点から観て非常に好結果を齎すべく又教師父兄中には公立学校一二通学中の児童を日本語学校に通わしたら成績が両方共よく無いと云ふ事を感じし日本語学校の方は止めさせようと考えている向きも沢山あつた程で英語の児童保護園は父兄側従来の要求であつた。学年が二ヶ年短縮されて日本語学の習得が従来より不完全になりはせぬかと心配する父兄もあるがたとへ八年間でも六年間でも教師の努力如何に依りて同様の効果を取めることが出来ると確信している云々」<sup>19)</sup>と述べている。

児童保護園の目的は，子どもたちの英語力を高め，公立学校において英語を習得することの困難さを少しでも緩和することであるとしている。外国語学校取締法によって余儀なくされたはずの幼稚科，小学部1・2年生の短縮であるが，その教育を英語で行うことによって，公立学校での英語と日本語学校での日本語の習得がかえってスムーズになり，親からも歓迎されていると述べられている。この記述には，家庭で日本語を話す日系の幼児が，ハワイの学校と社会の中で英語と日本語の両方を同時に学んでいくことへの親と教師の危惧が表れている。それと同時に，「周囲の不良化より保護する」とあるように，日本語学校へ通うことができない子どもたちが放課後に居場所を失って，子どもにとって不適切で危険と考えられる遊びをしたり，そのような場所へ行くことを防ごうというねらいがあったようである。親が就労している場合，幼稚科は何かを学び身につける場であると同時に，幼児の居場所でもあったのだろう。児童保護園は，幼児の居場所をすっかりなくしてしまうよりも，ハワイの実情に合わせて英語で保育し，日系の幼児が集い遊ぶ場を確保することを選択したのかもしれない。

1927年以降，小学部においては教科書をハワイ独自に編集したように，1923年の児童保護園の開設は，幼稚科の保育もハワイの実情に合わせて変化したことを意味するものであろう。それはつまり幼児期を過ごす幼い子どもにとっても，英語やアメリカ準州としてのハワイで生きる，ということに向き合わざるをえないという課題を

提示したといえよう。1927年には外国語取締法に対する違憲判決が出され日本語学校は従来通り存続できるようになったが、日系移民とその子どもたちに様々な混乱を引き起こしたのである。

##### (5) 家庭における子どもの暮らし

ではここで、日本語学校幼稚科に通っていた就学前の幼児が、生活の大半の時間を過ごしていた家庭において、どのような暮らしをしていたのか、ということについて見ておこう。

就学前の幼児の保護者は、大半が日本生まれの日本人であり、移民一世として、主に日本語のみを話す人が大部分であった。一世の子どもたちである二世は、ハワイ生まれであり、アメリカ合衆国の国籍を持ち、6歳の学齢期になるとアメリカの公立学校で義務教育を受け、アメリカ市民として育つことが求められることになった。日本人の親と暮らし、育てられつつ、アメリカ市民としても教育される。このような状況を幼い子どもたちはどのように生きていたのだろうか。

『移民の経験』は、河田登氏が著した日記であり、20世紀初頭に日本から移民した1世の男性がホノルルで大工として工場等で働きながら、結婚し、3人の子どもを育てていく様子が綴られている。1921年11月30日に家庭において助産師（産婆さん）の手を借りて、河田氏の長男実生が生まれている。親戚や知人友人に初衣を贈ってもらったり、彼らに対して命名の贈り物として茶器などを送ったりしている<sup>20)</sup>。また5月1日には初端午を祝うために、隣人と共に幟棹を起こして、大鯉5尾、小鯉3尾、吹貫1流れなどを用意している。「此処へ住んで居たら日本と少しも変わらない。近所隣には皆日本から来た人ばかりで、特に広島県人と山口県人が多く、殆どの習慣が同じなので、又言葉も通じ易い。其れで今日の幟起しも、同郡中島村出身の木村さんが日本流にして下さった。そうする事自体が懐かしいのであって、感謝せずには居られない。」<sup>21)</sup>と述べている。そして5月5日には、長男実生に初端午を祝って贈り物をくれた方々へ、注文しておいた柏餅を配ってお礼の訪問をいっている。午後には料理をしてお客さんにふるまっている。「小さなパーラーで来て下さった順に上下なしに坐って貰う。日本の様にお膳を出すのではなく、大きなテーブルを囲んで、其の上に馳走は各大平鉢に盛り出して、各自自由に小皿に取って貰う。植民地スタイルで式と云う堅苦しい事も脱きにして、息子の万歳はしなくては、と木村さんが音頭を採って、実生の無事成長を寿いで下さった。・・・実生はコナの母から贈って貰った初着の紋付きを着せて貰って、皆さんに抱いて貰ったり泣いたり笑われたり、一時は彼独占であったが・・・後略(一引用者)・・・」<sup>22)</sup>

ここでは親をはじめ、隣近所の人々の子どもの成長をねがう温かいまなざしが、子どもに対して惜しみなく注がれていることがよくわかる。また、「植民地スタイルで」といいながらも、「此処へ住んで居たら日本と少しも変わらない。」と述べられているように、故郷の日本は遠く離れているが、同郷の日本人同士が近くに住み、支え合い日々の暮らしを送っているのである。そこには、初衣、鯉のぼり、柏餅など、日本の子育て文化・生活文化そのものを生きようとする人々の姿がある。彼らの生活の中には日本的な子育てが確かに位置づけられている。二世の子どもたちは、ハワイにおいても、日系一世である大人たちの温かいまなざしの下で、日本的な生活様式や文化、そして日本語を身につけて育っていったのであろう。乳幼児の生活世界は、保護者としての両親や、近隣の人々の関係のなかで営まれてゆく。つまり家庭や隣近所の人々が日本的文化や日本語の中で生きている、ということは、そこに生まれた乳幼児もまた日本的なものに囲まれ、自然にそれらを身につけていくのである<sup>23)</sup>。

1926年9月3日には、長男実生がカイク日本語学校幼稚科へ入学している。「布哇では夏期休課の終わった9月の初月曜日が新学期開始らしく、今日3日の月曜日を以って開校されるので、長男実生をカイク日本語学校幼稚科へ入学さすためミサノは連れて行く事にして居る。たったこの間生まれたように思っているが、もう6才近く成って居る。カイク日本語学校校長は井ノ口宇衛門氏である。」<sup>24)</sup>と書かれている。そして次の年の6月には、実生は幼稚科を卒業し、「元気で進級」<sup>25)</sup>しているのである。その間、幼稚科でどのような保育を受けたのかについての記述がないため、その様子を知ることはできない。しかし、1926年のカイク日本語学校幼稚科は、先に見たように、英語保護園だった可能性が高い。そのため『日布時事』に掲載されていたパラマ学園幼稚科と同じような保育内容が行われていたのであろう。

一方でハワイ無償幼稚園協会が開設していた幼稚園に通っていた日系幼児も多数いた。そこで次に、ハワイ無償幼稚園協会の保育について分析を行う。

### 3. ハワイ無償幼稚園の保育

#### (1) 概要

1895年にキャッスル基金 (Samuel N.& Mary Castle Foundation) を財団として、キャッスル夫妻の娘・ハリエット・キャッスル(Castle, Harriett)の尽力により、ハワイ無償幼稚園協会(Free Kindergarten and Children's Aid Association of the Hawaiian Islands) がハワイ・ホノルルに設立された<sup>26)</sup>。協会は、無償幼稚園、プレイグラウンド、ナーサリー、児童養護施設などを設立し、ハワイの就学前教育をリードしてきた。キャッスル夫妻とハリエット・キャッスルは、アメリカ進歩主義教育の唱道者であったジョン・デューイや、プラグマティズム哲学者のG.H.ミードと親交をもち、彼らの思想に大きな影響を受けていた<sup>27)</sup>。

このハワイ無償幼稚園協会が設立した無償幼稚園に多数の日系をはじめ、中国、フィリピン、ハワイアンなど様々な人種の子どもたちが通園していた。無償幼稚園協会が発行していた機関誌『カレンダー』によると、1908年から1940年までの、各ハワイ無償幼稚園に通園していた日系の幼児の人数は下の<表4>のように整理することができる。

<表4> (『カレンダー』より塩路晶子作成)

Hawaii Free Kindergarten	1908	1914－ 1915	1916－ 1917	1917－ 1918	1918－ 1919	1921－ 1922	1922－ 1923	1923－ 1924	1927	1936	1940
Palama	103	159	117	121	68	36	32	118			
Nuuanu						87	83	120	120		
Fort Street	66	100	64	155	104	39	47	26			
Miller Street		11	10	8	15	44	37				
Mother Rice						53	59	70	160	111	65
Kauluwela		41	92	92	19	37					
Beretania		26	65	77	98	31	31	37	40	63	38
Kalihi		37	56	68	60	50	50	37			
Muriel		89	52	36	38	44	67	72	95	71	64
Liliha Street					80	60	76	85	49	48	43
Kalihi-kai						7	24	40	36		
Kinau								34	11	12	
Na Lei									120	54	85
Kalihi Union									55	56	38
Jane S. Parke										36	65
Lanakila										23	31
Affiliated Kindergartens(6)										227	
Ke Ala Hou											17
Liholiho											11
Vineyard Street	20										
Kakaako	29										
Total	218	463	456	557	482	488	506	639	686	701	457

先に見た、1932年の布哇教育会所属の日本語学校幼稚科に通園していた日系幼児の総数は1456人であること

と、1927年にハワイ無償幼稚園に通園していた日系幼児の総数が686人、1936年の総数が701人であることを比較すると、英語で保育を行う無償幼稚園に通園していたのは幼稚科の約半数であることが分かる。

また、機関誌『カレンダー』から、1908年から1940年までの、各ハワイ無償幼稚園に通園していた日系幼児が占めていた割合（％）は下の〈表5〉のように整理することができる。

〈表5〉 (『カレンダー』より塩路晶子作成)

Hawaii Free Kindergarten	1908	1914－ 1915	1916－ 1917	1917－ 1918	1918－ 1919	1921－ 1922	1922－ 1923	1923－ 1924	1927	1936	1940
Palama	45.6	55.0	48.1	53.5	39.5	38.7	39.5	72.0			
Nuuanu						100.0	97.6	99.2	92.3		
Fort Street	58.9	47.2	41.6	63.8	56.2	33.1	37.9	33.3			
Miller Street	0.0	11.7	8.5	5.9	7.5	33.8	39.8				
Mother Rice						70.7	74.7	94.6	93.6	88.8	72.2
Kauluwela		22.3	35.7	44.7	38.0	30.8					
Beretania		22.4	29.4	29.5	43.8	25.8	27.9	32.2	31.7	55.3	37.3
Kalihi		34.9	50.9	55.3	53.6	52.1	47.2	34.9			
Muriel		35.6	26.9	20.0	25.9	37.6	48.9	68.6	79.2	61.7	61.5
Liliha Street					44.7	53.6	57.1	64.4	37.7	43.2	40.2
Kalihi-kai						10.0	36.4	62.5	50.0		
Kinau								35.8	12.5	11.4	
Na Lei									67.4	35.8	50.9
Kalihi Union									41.7	37.5	40.0
Jane S. Parke										45.2	47.8
Lanakila										33.3	38.8
Affiliated Kindergatens(6)										69.8	
Ke Ala Hou											22.4
Liholiho											19.0
Vineyard Street	14.2										
Kakaako	18.4										

上記の表によると、日系幼児の割合が高い幼稚園は、ヌアヌ幼稚園、マザー・ライス幼稚園、ミュリエル幼稚園などである。

## (2) 保育内容

これら無償幼稚園は、午前中を中心に開設されていた。働く母親は多くの乳幼児をかかえていて、どこの幼稚園も、入園希望者であふれかえっていたようである<sup>28)</sup>。保育者はアメリカ本土出身の白人女性がディレクターとなり、担任保育者やアシスタントには白人女性だけでなく、日系女性や他の人種もついていた。

日系幼児を含む子どもたちは、無償幼稚園でどのように遊んでいたのだろうか。1921年－1922年の『カレンダー』には、子どもたちがプレイハウスの中で食事や洗濯、アイロンがけなどのごっこ遊びをする様子が次のように記録されている。

「4人の子どもたちが近くでお茶会を開いていて、そのうちの一人がカップ・アンド・ソーサーとスプーンと刻んだ葉っぱを乗せたお皿を乗せたお盆を持って私たちのそばを通り過ぎた。(・・・中略・・・(－引用者)) 食べ終わると、訪問者のうちの一人が突然にプレイハウスの中に歩いていき、そこでは小さなハウスイフが本

当に傷ついて不平を言っていた。『なぜ彼女はノックもせずに私の家に入ってくるのかしら?』(・・・中略・・・  
 (一引用者) お茶が終わって、遊びを本物にするのに必要である洗いおけ・水・石鹸・タオルの見立てがなくとも、お皿を洗って拭いた。別のコーナーにおいては、ある子どもは二つのイスの間に間に合わせて作られたアイロン台でアイロンをしている。(・・・中略・・・ (一引用者)) 別の子どもは、二つのイスの間のひもの上の衣類から判断すると、大きな洗濯を終えたばかりだ。庭の草の上の子どもたちは本物の水と石鹸で人形の衣服を洗っていて、しかしそれはまさに洗濯ごっこと同じくらい楽しいのだ。』<sup>29)</sup>

幼稚園の訪問者が突然、子どもが遊んでいたプレイハウスの中を歩いたのを、自分たちのごっこ遊びの世界をじゃまされたと怒るほど、子どもはこの遊びに夢中になっている。ここでは洗い物やアイロンなどの見立て・ふり遊びと、実際に本物の水と石けんを使う洗濯遊びなどの両方を行っているようである。カップ・アンド・ソーサーを使ったお茶会、アイロン、洗濯などのごっこ遊びは、子どもたちの生活の再現である。しかし子どもたちの大半が日系幼児であることを考えると、子どもたちが実際に家庭で行っている活動というよりは、幼稚園の保育者が「理想とする生活」の再現だったのであろう。子どもたちは遊びの中で楽しさを味わうと同時に、このような家庭生活をする力を子どもたちが身につけることがのぞまれていたと考えられる。

またこのような身近な家庭生活のごっこ遊びだけでなく、子どもたちは様々な社会的役割を担っている職業を模倣し、ブロックや粘土や廃材などを用いて、興味のあるものを作って、よりダイナミックな遊びを下記のように展開している。

「90人以上の子どもたちの一人ひとりが、自分自身や友だちの課題で、忙しく活動している。私たちの目の前に現れたり消えたりする飛行機、ボート、列車、お店、家、お寺に限りはない。パイロット、船長、エンジニア、コンダクター、キャプテンは、形やブロックを用いて使うように作った複雑な課題に働きかけている。ここで作るときに、産業者のリーダー、発明家、数学者、商人、主婦、芸術家が存在しているし、彼らはこれらの最初のステップは後のものと同様に未来の成功に向けて重要ではないと述べるだろう。』<sup>30)</sup>

子どもたちは、教師によって与えられた課題ではなく、「自分自身や友達」の課題に忙しく取り組んでいるのである。そして、次々にパイロットなどになって飛行機などのものを見立てたり作り出したりしている。子どもたちはこれらの活動を将来の職業に就くスキル獲得のためにしているのではなく、今この時の楽しさを大切にしているのである。

「あなたはひょっとしてタクシーが欲しいですか？ここに大きなブロックで作ったものが一つあって、そのため何人かのお客さんが乗ることができる。(・・・中略・・・ (一引用者)) 腕にお人形を持って帽子とコートを着た小さな女の子がやってきて、彼に自分の赤ちゃんが病気なのでお医者さんに連れて行ってくれるように頼んだ。(・・・中略・・・ (一引用者)) 別の車もあり、それがあまりに多いのも事実なので、交通整理の人が必要なのである。ソーダ水のボトルのキャップから作られた星が、小さな少年を警察官にするのに必要なすべてのシンボルであり、彼が、この混雑したストリートでの交通を支持するときに腕を右に左に動かしていた。(・・・中略・・・ (一引用者)) しかし、お金はどこで払う？誰かがすでに紙とハサミを取りに行っていて、そういうがはやいが、お金を切って、ガソリンを売る人は支払い、タクシーは失った時間を取り戻すためにフルスピードで旅を続けている。(・・・中略・・・ (一引用者)) すべての人はドル、ハーフ、クォーター、ダイム、ニッケルのお金を切った。その人のポケットは入れすぎで膨らんでいる。銀行家の息子が困っているのに気がついて、それを銀行に預けるように示唆した。(・・・中略・・・ (一引用者)) そこで遊びは継続している。一つの物事は別の物事を導いている。タクシーは子どもたちをサンフランシスコや東洋まで連れて行ってくれるのを待っているボートに運転していく。車はちょうちんパレードにしたがって装飾され、たくさんのケアとオリジナリティが紙ちょうちんを切ったり色づけしたりしているのに見られる。(・・・中略・・・ (一引用者)) 毎日新しい出来事や新しい物語が語られている。』<sup>31)</sup>

最初のタクシーごっこが、次の警官やガソリンスタンドなどの展開を次々に生み出している。その展開の中で必要なお金や星のマークなどを紙や廃材で作って工夫している。一つの遊びがつながって大きな遊びに広がっていく様はさながらプロジェクト活動の様を呈している。このような保育が行われたのは、ハワイ無償幼稚園がアメリカ進歩主義教育の流れをくむものだからであろう。そして、子どもたちが遊びに満足した様子や高揚感が次のように記録されている。

「しかし見てください！子どもたちは冒険から帰ってきていて、彼らのバケツは素敵な花でいっぱい、彼らの顔は決して地面や海ではない光に満ちている。彼らは走っているし、スキップしているし、彼らの足は地面に触れている。『花の歌を歌おう、見るのがすごくうれしい花の』彼らは歌い、そのとき部屋は踊っている足でい



っぱいで、というのも子どもたちはダンスをしにやってきて一緒に遊んでいる。』<sup>32)</sup>

子どもたちは、このような身近な家庭生活の再現遊びを通して、生活を営むスキルを身につけると同時に、様々なプロジェクト活動で創造的に物語を生み出し遊びを展開していった。それは保育者によって押しつけられた遊びではなく、子どもから生み出された遊びである。これが大きな満足感につながっているのであろう。

また幼稚園は特に、母親に対して子育てや生活習慣を教育することに熱心であった。そのため、多くの幼稚園が母親ミーティングを行っていた。日系の幼児が多く通っていた、マザー・ライス幼稚園やカリヒ・カイ幼稚園でのミーティングが『カレンダー』に記録されている。それによると、幼稚園は幼児の遊びの様子を母親たちに説明していたが、母親たちは当初あまり興味を示さなかったようである。それでも、幼稚園は家庭との協力関係や信頼関係を徐々に築き、母親たちは毎日20-30人が幼稚園を訪問し子どもたちを観察するまでになった。

「彼女たちはランチョンマットやナプキンに大いに興味を示して、私たちはそれらをつくっていたし、熱心に用いられるところを観察していた。多くの母親がこの習慣を家庭で採用し、子どもたちにランチョンマットやナプキンなしで食べないようにしていた。』<sup>33)</sup>

当時、日系移民の家庭において、ランチョンマットやナプキンを使って食事をする習慣は少なかったであろう。しかし、幼稚園での母親ミーティングを通じて、このような食事習慣が日系移民の家庭にも取り入れられていったのである。

さらに、母親ミーティングは、子どもの衛生や栄養を保つ教育にも熱心であった。「ハンカチについての主題が話し合われ、ハンカチをいかに用いるのかということ、毎日きれいにしなければならないということなどを学ぶのが子どもたちにとってなぜ必要なのかということ母親に説明するものであった。(・・・中略・・・(一引用者)) ミセス・ラッセルは他の物事の中でも母親に対して、栄養があって、簡単に作れて、安くて、みんな好きな二つの野菜スープの作り方を教えた。調査によると、家族の食事の多くは野菜不足であるとわかった。』<sup>34)</sup>

さらに、ハワイ無償幼稚園における保育の中で最も重要な位置を占めていたことは、日系の子どもたちを中心に遊びを通して英語を身につけさせるということであろう。「言語の興味がこの時期に強いように、幼稚園は子どもに英語の生きた知識においてよいスタートを与える責任を持っている。この責任を私たちは十分に理解しているし、毎年十分に満たす努力をしている。』<sup>35)</sup>と述べている。子どもが言語を身につけるにあたっての、幼児期の重要性を認識していたのである。

また、1922-23年には通園する約97.6%が日系の子どもたちであった、ヌアヌ幼稚園の園長であるミセス・シビル・ダグハーティは、子どもたちが幼稚園の遊びの中で英語を身につけていく様子を次のように報告している<sup>36)</sup>。「ランチの時間は本物の会話のやりとりの素晴らしい時間である。ランチを提供することは『ありがとう』『お水をいただけますか?』『ご飯を取ってください』のような形式を用いる機会になっており、教師はパターンとして標準をセッティングしている。」

「人形を用いた遊びやお家ごっこは、日常生活で行われる会話の最も自然な機会になっている。教師は再びパターンとして、これらの幼い主婦たちに呼びかけて、ランチを提供したり赤ちゃんのお世話をしたり、家事の活動することに会話は集中している。そしてこれらの忙しい主婦たちはドレスアップして、散歩に行き、ストリート・カーに乗ったり、アロハ・パークまで出かけたり、買い物にお店に行ったりする。私たちが歌っている簡単なセンテンスの歌や小さな詩句や興味ある物事についての物語は、付随的に言語表現の役に立っている。」

「子どもが何かをつらく感じていて、彼の感情を表現する言葉をもっていないとき、教師は言いたいのに言えないことを子どものために言うときがある。」

「絵本を見ることは共通の主題についてたくさん会話することになり、子どもは自分ができるベストの言葉に自らの考えを置き換え、教師はよりよい形にそれをフォローしていく。」

「郵便局プロジェクトは手紙や、それらが引き出す答えを受け取ったり読んだりする中に多くの可能性をもっている。」

「おもちゃの電話は会話を刺激し、教師はおそらく別の子どもが聞いている間、ある子どもに電話する。」

「事実、言語の機会を持たない幼稚園での活動というのは存在しない。できるだけ最も自然な方法で、これらの興味が最も高まったとき、子どもは新しい言葉や表現の新しい方法や、自分の周囲の生活を理解しようと努力している言語を吸収するし、なぜなら彼は自分自身を表現するためにこれらの方法を必要としているからである。」

英語を身につけることはランチなどの生活場面や、買い物ごっこ、郵便ごっこ、電話ごっこなどの遊び、絵本の読み聞かせや話し合いを通して行われていた。また教師は子どもの気持ちや言いたいことを代弁するような支

援をしていた。このように「できるだけ最も自然な方法で」幼稚園における英語の教育は行われていたようである。つまり幼児にとって言語を身につけることは、周囲の生活を理解し、他の幼児とかかわり、自らの気持ちを表現することと同義であるとらえられていた、といえよう。

### (3) インタビューより

日系幼児が幼稚園で英語を身につけていく様子について、日系二世のルース・フジモトさんに筆者からのインタビューの中で語っていただいた。インタビューは2011年7月5日にハワイ島ヒロのフジモトさんの自宅で行われた。インタビューは半構造化面接法によって行った。インタビューは日本語と英語で行われた。インタビューにはハワイ大学ヒロ校の本田正文先生も参加していただいた。フジモトさんは山口県出身の日系一世のお父さんとハワイ生まれの日系二世のお母さんのもと、1917年にハワイ島ヒロで生まれ、カウマナで育った。5歳（1922年頃）でカウマナの「英語幼稚園」<sup>37)</sup>に通園し、2年生から日本語学校へも通っていた。フジモトさんは家庭において、お父さんとは日本語で、お母さんとは英語で会話していたそうである。ご自身は英語と日本語を話すバイリンガルであり、長年、秘書や通訳として活躍しておられた。下の〈表6〉はインタビューの一部である。

〈表6〉

<p>S (筆者)：英語幼稚園ではどんなことをして遊んだか覚えていますか？折り紙とか？                  F (フジモトさん)：折り紙？そんなことしない。                  S：歌う？                  F：はい、歌う。だけど覚えてるのはねえ、My name is Ruth Fujimoto. っていうのを母に習って言ったら、ちゃあんと私はもう覚えてるよね。先生がDo you know your name? って言ったら、My name is Ruth Fujimoto. お隣にね、この間亡くなったのよ、ツトム。新聞に出ていた。フジモト・ツトム。He was・・・and his sister, his younger sister was・・・I don't think she was in the class. Fujimoto だから私の次よね。私がMy name is Ruth Fujimoto. って、Do you know your name? って彼に聞いたら、彼はね、My name is Tsutomu Hatsuko Fujimoto. って妹の名前を言うの。No, your name is Tsutomu. Hatsuko is your sister. You don't have to say your sister. Just your name. What is your name? My name is Tsutomu Hatsuko Fujimoto. これを覚えている。                  S：じゃあ、英語を教えてくださいましたか、幼稚園で。英語を話す？                  F：英語しか知らないもの。私は・・・パパがね。日本語と英語を一度に習うのはかわいそうだからって、英語のなにを行かなきゃいけないでしょ。だから一年、私のお友達より私は遅かったの。私は2年生になったときに、日本語学校へ行きました。うちでは日本語使ってるでしょ。パパが日本人だから。ママは英語が達者よね。普通、パパと話すときは日本語で。私を怒るときには英語で。                  S：じゃあ、幼稚園で歌うときにも英語の歌を歌うんですか？                  F：幼稚園では、あんまり歌って覚えてないよ・・・幼稚園の時何を覚えたかなあ<sup>38)</sup>。                  ・・・・中略（引用者）・・・                  F：あるときはメガネ・・・Do you know what is call? A glass 知らなかったの。だから私「メガーネ」って言った。Ok, that's all right, って言って、I remember I came home, パパ、メガネがどういうのか、って言うから私、「メガーネ」って言ったのよって。「メガーネ」って言ったのよって。そしたらパパが笑ったの。</p>
---

フジモトさんはインタビュー当時、93歳であるが、幼児期の記憶をたどっていただくことができた。インタビューによるとフジモトさんは3歳の頃、家庭では琴を習って、日系人の友達といっしょに「サクラ・サクラ」を弾いて発表会に出るなど、日本文化を身につける暮らしをしていた。近所の日系の友達とおにごっこやおじゃま（お手玉）、スティール・ストーンという遊びをしていたそうである。一方でお母さんが英語も話す日系二世だったこともあり、幼稚園は日系人だけでなく他の人種もいた英語の幼稚園に通っていた。幼稚園での遊びや歌についてはあまり記憶がなく、英語を話すことを学んだことについて述懐している。自己紹介のときのお友達と先生のやりとりのことや、メガネを英語で何というかと幼稚園の先生に聞かれて、「メガーネ」と英語的な発音で答えたことなど、ユーモアを交えて話していただいた。フジモトさんが通っていた幼稚園が無償幼稚園協会の幼稚園かどうかはわからないが、日系の幼児が幼稚園でアメリカ文化や英語に触れて、幼児なりに取り組んでいた姿がよくわかる。

## 4. おわりに

以上のように、ハワイ日系移民の子どもたちが公立学校に就学する前にどのような教育を受けていたのかということについて、日本語学校の幼稚科と、無償幼稚園協会の幼稚園の保育に焦点をあてて考察してきた。

就学前の幼児は家庭で生活する時間が長く、日系一世である親や近隣の人々の日本の生活習慣を保持したコミ

ユニティの中で暮らしていた。そのため、幼児も自然に日本の生活習慣や日本語を話す力を身につけていたと考えられる。このように家庭で日本の文化を身につけたことをベースに、子どもたちはそれぞれ日本語学校幼稚科や、無償幼稚園協会の幼稚園に通っていたのである。

日本語学校の幼稚科においては、一日1時間程度の短い時間ではあるが、遊戯や唱歌など、日本の幼稚園の保育項目に近い遊びをしていたようである。幼稚科においては、小学部のように教科書を用いた文字指導等が行われていたわけではない。そこで子どもたちは、日本語の読み書きを覚えるというよりも、家庭の外ではじめての集団生活を送り、日系人の子ども同士が遊び、互いの関係の中で生活世界を広げていった。そこでは保育者も友達も日本人・日系人であり、その関係性は、家庭での日本文化の延長線上にあったと考えられる。1923-1927年までは英語で保育を行う児童保護園を開設した幼稚科もあり、幼児期という就学前の幼い時期から、日本的なものの継承とアメリカ的なものの受け入れ、つまり日本の文化とハワイ（アメリカ）の文化の両方に対して、子どもたちがどのように向き合っていくか、という課題に直面することになっていったといえよう。

一方でハワイ無償幼稚園協会の幼稚園では、アメリカ進歩主義教育運動に影響を受けた保育の中で、ごっこ遊びやプロジェクト活動などの遊びを行い、日系人だけでなく他の人種の子どもたちも一緒に、アメリカ的な遊びや生活習慣や、英語に触れていった。それは、日本文化の中にある家庭で生活する幼児が、はじめてアメリカ文化に触れる時間でもあったろう。そこには自らの家庭での日本語を通じた日本の生活と、幼稚園での英語を通じたアメリカ的生活の間にギャップを感じる幼児もいたかもしれない。また、無償幼稚園での保育や母親ミーティングなどにおいて幼児や母親が身につけたものが、日系幼児の家庭生活に影響を及ぼしたこともあろう。

児童保護園開設時のパラマ学園の校長の記述や、フジモトさんのお父さんが「日本語と英語を一度に習うのはかわいそうだからって」とおっしゃっていたことを考えると、日系一世の親たちは、日本的な家庭生活の中で子育てをしつつも、日本語と英語を身につけさせることにはかなり配慮していたことがうかがえる。親たちは自らの子どもを、日本語学校幼稚科か、あるいは無償幼稚園など英語の幼稚園のどちらに入園させるかを、どのようにして選択していたのだろうか。子どもによっては、午前中に無償幼稚園に通い、午後から日本語学校幼稚科に通っていた可能性も考えられる。さらに親の就労時間の関係（長時間子どもの保育を必要とするなど）や、住居と幼稚園との距離との関係も、それぞれの幼稚園の選択に影響している可能性もある。

また、日本語学校幼稚科及び、無償幼稚園のそれぞれにおいて、幼児が身につけたことは公立学校へ入学するにあたり、どのように影響していたのだろうか。幼稚園の保育は教科書を用いないため、保育実践についての記録や、保育の体験者の語りが当時を知る重要な手がかりとなる。本研究で十分に調査できなかった資料を、今後とも検討していく必要がある。

いずれにしても、幼稚園は子どもにとって、家庭から出て、広い人間関係、他の価値観や文化などに会う最初の場になる可能性が高い。そのため、日本語学校幼稚科も、ハワイ無償幼稚園も、その保育内容には、その時代を生きる日系の子どもの姿や日系一世の保護者の願い、そしてアメリカ合衆国の準州としてのハワイ社会の価値・文化などが色濃く反映されているのである。

謝辞：ハワイ島ヒロでのインタビューに答えていただいたニシ・トモエさん、ルース・フジモトさん、そしてインタビュー調査をアレンジしていただいたハワイ大学ヒロ校の本田正文先生（布哇日系人会館館長）に心から感謝の意を表したい。

付記：本研究は、平成23年度科学研究費補助金（若手（B）21730628）の交付を受けて行ったものである。

- 1) 沖田行司『ハワイ日系移民の教育史』ミネルヴァ書房、1997年。
- 2) 足立津宏「ハワイの公立学校教育と日系二世のアメリカ化」小島勝『在外子弟教育の研究』玉川大学出版会、2003年。
- 3) 吉田亮『ハワイ日系二世とキリスト教移民教育』学術出版会、2008年。
- 4) 金子邦秀「ハワイの日本語学校の教科書の分析」同志社大学人文科学研究所編『1920年代ハワイ日系人のアメリカ化の諸相』1995年、金子邦秀『馬哇新聞』に見る日本語学校の行事と教科書』沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容』ナカニシヤ出版、1998年。
- 5) 井上智義「ハワイ日系二世の教育と言語習得に関する一考察」同志社大学人文科学研究所編、前掲書。
- 6) ハルミ・ベフ『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院、2002年、101-104頁。

- 7) 1915年の公立学校の全生徒数は36,529人, うち日系人生徒数は13,552人で, 約3分の1を占めている。(小沢義浄『ハワイ日本語学校教育史』ハワイ教育会, 1972年, 70頁。)また, 1928年の公立学校の全生徒数は70,316人, うち日系人生徒数は36,895人, 私立学校は全生徒数11,075人, うち日系人生徒数は2,395人, 合計では81,391人のうち39,290人で約48%が日系人生徒である。(小沢義浄, 同上書, 164頁)
- 8) 『マキキ日本語学校創立七五周年記念誌』, 『マノア日本語学校創立六十周年記念誌』
- 9) 小沢義浄, 同上書, 205頁。
- 10) 文部省『幼稚園百年のあゆみ』1977年, 82頁。
- 11) パラマ日本語学校校友会『パラマ校友誌第1号記念特集』1931年。(なお, 小学部(1~4年生)は午後2時30分から3時20分まで, 土曜日は午前8時から8時50分まで, 小学部5, 6年生と中女学部, 高等科は午後3時30分から午後5時10分まで, 土曜日は午前9時から10時35分までとなっている。)
- 12) パラマ日本語学校校友会, 同上書。
- 13) 古生美男『家庭中心子供の教育』家庭の友社, 昭和11年, 122頁。
- 14) 文部省『幼稚園百年のあゆみ』1977年, 8頁
- 15) ニシさんにフレーベルの第一恩物の実物を見ていただいたが, 遊んだ記憶はないとのことであった。
- 16) 『日布時事』, 1923年1月4日。
- 17) 『日布時事』, 1923年1月3日。なお, この日の記事では「児童委託所」という名称になっている。
- 18) 『日布時事』, 1923年1月3日。
- 19) 『日布時事』, 1923年1月4日。旧仮名遣いは新仮名遣いに改めている。
- 20) 河田登『移民の経験』大和印刷, 昭和49年, 640頁。
- 21) 同上書, 664-665頁。
- 22) 同上書, 666頁。
- 23) ニシ・トモエさんはインタビューの中で, 『幼年倶楽部』『少女倶楽部』のような雑誌を毎月読んでいたと述懐していただいた。『幼年倶楽部』は, 1925年に講談社から発行された幼児向けの雑誌であり, 日本国内から遠く離れたハワイの幼児にも愛読されていたのである。雑誌を通じて子どもたちは日本の遊びや文化に親しんでいたのであろう。
- 24) 河田, 前掲書, 13頁。
- 25) 河田, 前掲書, 71頁。
- 26) ハワイ無償幼稚園協会および協会と関係のあるキャッスル幼稚園, キャッスル・ナーサリー・スクールについては, 塩路晶子「アメリカ進歩主義教育における保育内容に関する一考察」『鳴門教育大学研究紀要』第25巻, 2010年を参照。
- 27) Alfred L. Castle, Harriet Castle and the Beginnings of Progressive Kindergarten Education in Hawaii 1894-1900, *The Hawaiian Journal of History*, 23, 1989. なお, キャッスル基金は現在もハワイの幼児教育, 子どもの福祉や健康などに取り組み, 経済的・思想的にリーダーシップを取っている。
- 28) *Calendar*, 1922-1923
- 29) *Calendar*, 1921-1922, pp.26-27.
- 30) *Ibid.*, p.28.
- 31) *Ibid.*, pp.30-31.
- 32) *Ibid.*, p.31.
- 33) *Calendar*, 1922-1923, p.25.
- 34) *Ibid.*, p.26.
- 35) *Calendar*, 1922-1923, p.27.
- 36) *Calendar*, 1922-1923, pp.27-28.
- 37) フジモトさんの幼稚園の担任教師だったミス・イズモ(熊本県出身)は, *Pahoa Yesterday* (Hiroo Sato, *Hawai'i Japanese Center*, 2007) に記載されている日本語学校教師ミス・イズモと同一人物のようである。
- 38) フジモトさんが記憶していた歌は, 「ももたろう」と「もしもしかめよ」であった。日本語学校の小学部で覚えたようである。また筆者はこのインタビューの中で, フレーベルの恩物の実物と写真をフジモトさんに見ていただいたが, 見たことはない, とのことだった。積み木で遊んだ記憶もないそうである。

# **A Study of the Early Childhood Education for Japanese–American Children during the Early 20<sup>th</sup> Century**

SHIOJI Akiko

This paper aims to analyze how Japanese–American children (Nisei) were educated in Japanese language school kindergarten in comparison with Free kindergartens in Hawaii during the early 20<sup>th</sup> century, before they entered public elementary school. Some Japanese–American children went to Japanese language school kindergartens that were built by Japanese immigrants (Issei) in order to preserve Japanese language and Japanese culture. These kindergartens' educational contents consisted of Play (Yugi), Singing a song (Shoka), and so on. Other Japanese–American children went to Hawaii's Free kindergarten. Those were influenced by American progressive education. Those educational contents consisted of mainly Play in the context of the child's everyday life and his or her interests. Children learned many habits, behaviors and language through play at any kindergartens. And young Japanese–American children had to face to the inheritance of Japanese custom and the adaptation of American custom.